

〔入社して〕3ヵ月弱は〔トレーニングが〕ありましたね。基本的には、半分が保安。半分がサービス。最初に保安の訓練を1ヵ月ちょっと受けて、で、最後の試験に合格して、サービスの訓練に入って、っていう感じですかね。けっこう楽しかったです。

G航空、〔男性の客室乗務員は〕多いですね。1割いないですけど。1回の飛行機に、自分だけが男性〔のクルー〕っていうことは、そんなになかったの。ジャンボで18人乗ってれば、まあ、2、3人、男性〔のクルー〕がいてもおかしくない。

〔はじめてフライトしたときって〕ひじょうに驚きました。それまで自分が〔乗客として〕乗った飛行機は、国際線のばあい、日本発着の国際線で、お客さまも基本的には日本人じゃないですか。でも、はじめてのフライトが、アジア内の往復だったんですけど、日本人のお客さまはいなくて、アジアの方と欧米の方でした。いちばん印象に残ってるのが到着後の機内の様子。すごく驚いて。読み終わった新聞や食べ終わったものなんか、座席下に散乱してるんですよ。ほんとにショックでしたね。

〔そして〕はじめて乗った長距離便はアジアから北米までの便でした。さっきのアジア間のフライトだと片道2時間ぐらいですけど、北米までは10時間、12時間。それだけ長い時間飛んでると、アジア線以上に座席下にはものが散乱。G航空は、いつも満席だったので、通路しか歩けなくて。当然、お客さまの足下、座席下のゴミは拾えないんです。お客さまが降りたあとの飛行機を見て、さらにショックでしたね。〔まちがった職業に就いたとは思いませんでしたが〕自分の求めているサービスができる会社とは違うかもしれないな、と思いました。だから、最初のころはけっこう、ほかの航空会社を受けてましたね。どこも受からず、けっきょく、5年いたんですけど。

5年間満了したときに、ちょうどいまの会社が受かって。で、いま、〔ヨーロッパの〕H航空で〔働

いています。いまのH航空の飛行機は〕清潔でショックを受けることもなくなりました。すごい働きやすいです。まず、乗務員も違いますし、〔ぼくが乗る〕路線も日本線だけです。やっぱり、日本線における日本人〔クルー〕なので、必要とされてるじゃないですか。たとえば、東南アジアからニューヨークに飛ぶ路線って、日本人のお客さまがいない。〔そういう〕ところで、はたして、なんで、ぼくは乗っているんだろうっていうのが多いんですね。でも、日本から〔H航空の本社のある〕ヨーロッパに行く便だったら、自分が必要とされてるのがわかるじゃないですか。で、じっさいに、自分のやりがいもありますし、本国人クルーがすごく働きやすいので、これはもう、いつも、同期とかで、「ほんとに、この会社でよかったね」って。同僚もほかの航空会社で客室乗務員を経験していた人が多くて、それで、みんな、他社を知っていて。で、もう、毎回、毎回、「ほんとに、H航空はいいよね、H航空はいいよね」っていう話をしながら。

〔そして〕男性客室乗務員の多くは、ゲイか、バイセクシャルですね。〔それは〕H航空以外にも〔おなじです〕。なんででしょうね。なんか、その、ゲイとかバイセクシャルの男性をみていると、たとえば、飛行機の業界でいうと、パイロットではなくて、客室乗務員とか。医療関係だったら、医師ではなくて、看護師さんとか。なぜか一般的に、女性が多い職種のほうが〔ゲイ男性が〕多いですよ。なんでですかね。べつに、なんか、そういうひとたちが多くから、なりたかった、っていうわけではないんですが。

〔ぼくは〕途中では、気づきましたけど。なんか、話を聞いてるうちに、ああ、そういう職場なんだって気づいたんですけど。まあ、べつに、それは、多くても少なくとも、自分のなかではどっちでもよかったんですが。——『月刊エアライン』っていう雑誌があるんですけど、〔当時はまだ〕インターネットなんかないので、その雑誌の後ろの

ほうに、「売ります／買います」みたいなのが載っていたんですね。父親が出張に行くと、航空会社のグッズとかを持って帰ってきてくれてたんですよ、開けずに。2つめとか3つめって、交換しましょうとか、売りましょうみたいなところに出してたんですよ。そうしたら、現役のクルーから、「じゃあ、交換しましょう」という連絡が来て。で、会って話をしていたら、そのとき男性〔のクルー〕に会ったことはなかったんですけど、女性のクルーのひとたちから、そういう「ゲイとかバイのひとは多いんだよ」というのは聞いたりして。「だから、気をつけてね」とって、よく言われてました（笑い）。

〔性同一性障害のひとが同僚にいないか、ですか？〕前の会社で1人いましたね。女性〔から男性へのひと〕なんだけれども。じっさいに、一緒に働いても、まあ、たしかに男性っぽい雰囲気ですけど、いかんせん、前の会社には〔トランスジェンダーのひとを受け入れる〕そのシステムがなかったの、女性客室乗務員の制服を着ていて。でも、彼女も、それは割り切って。まあ、「仕事」という割り切りみたいな感じですね。でも、私生活ではもう、ぜんぜん違う感じで。〔気がついたのは〕そのひとぐらいですかね。

〔うちの業界は〕ゲイ、バイセクシュアルの男性には〔居心地がよくて〕あれですけど、レズビアンとかトランスジェンダーのひとは、あまり見ないですね。なんででしょうね？ わかんないですけど。

人つながりでのゲイとの出会い

〔いま、自分のことを表現するとすれば〕「ゲイ」ですかね。べつに、それは、なにか〔特別な思い入れ〕があるわけでもなく、言いやすいからというだけで。ぼくのばあいは、世間がいつのまにか使っていた〔から〕っていう感じですね。まあ、なんか、言葉のニュアンスとして、「ホモ」のほうに否定的な感じがします。

〔はじめてゲイのひとと会ったのは〕2000年に、I航空の客室乗務員の採用試験を受けていて、身体検査のとき、男女別になるじゃないですか。そこで、視力検査があるんですけど、コンタクトレンズをすぐ外して裸眼を計ったばあいて、正しい裸眼の値が出ないらしいんですね。なので、「半日間、コンタクトと眼鏡を外してもらいます」とって言われて。ぼく外すと、ナニナニ室って書いてあるのも読めないんですよ。で、同じグループになった受験者にけっこう仲良くなった子がいて助けてもらっていたら、その子がそうだった。

試験が大阪だったんですけど、そのあとで東京に帰ってきて、中華料理を食べてるときに、むこうが、「どうなの？〔きみは〕ゲイなの？」っていう話をしてくて、そのときは、なんか、おれも、ほんとに全然、接したことがない段階で、「えっ、きみは？」みたいな感じで。そしたら、「そうだよ」とって言って。「ああ、そうなんだ」とって。「まあ、おれもそうだとは思うけども、でもべつに、なんか、よくわかんないんだよな」とみたいな話でしたね。

〔はじめて男性とつきあいだしたのは〕2001、2年。もう〔仕事で空を〕飛んでましたね。それまでは、自分のなかで、男性とつきあうっていうのが、あまり現実的に考えていなかったの。どうですかね？ つきあえたらいいな、ぐらひはあったかもしれないですね。食欲にそれを求めてたっていうことはないですね。〔ゲイにかんする情報を一生懸命集めてたっていうことも〕全然なかったですね。

〔男性とつきあい始めたきっかけは〕別の会社の客室乗務員とみんなでちゃんこ鍋を食べたんです。そのときに、たまたま、そのつきあうことになるひとが、おない年だったんですけど、まあ、なんか、話があって。で、最初はべつにおたがいゲイだっっていうのを言ってなかったんですけど、まあ、そうだろうなっていうのが、だんだん、こう、話してるうちに、おたがいわかってきて。〔話してて〕

それっぽいなどは思ったと思います、なんとなく。なんだろう？物腰が柔らかかったりだとか。まあ、考え方とかですかね。——普通に歩いてるひとを見ても〔ゲイだってわかるというゲイのひともいるみたいだけど、ぼくは〕あまりそのへん、わからないんですよ。全然わからないです。

〔話を戻すと〕ちゃんこ鍋で、まあ、話があい、それで、そのあと何度かふたりで会って、遊びに行くようになって、で、それでつきあいだしたんですね。そのときは、ドキドキしてましたね。はい。〔おなじ性的な体験といっても、女性と男性とでは〕違いますね。なんだろう、女性相手のときは、まあ、ほんと、義務感じゃないですけど。ほんと、からだはたしかに気持ちはいいですけども、べつに興奮するとかではなく。自分の性的な対象である男性とのほうが、自分のなかで、こころがより盛り上がる感じですね。

〔中学のときの親友がおなじゲイだってわかったきっかけですか？〕それは、F 航空のとき、おない年の同僚がいたんですけど、その同僚と中学校の親友と3人で、おない年だっていうので、「じゃ、飲もうか」って言って。こっちはもう、F 航空の同僚とはゲイだっていうのは知っていて、おたがいに。まあ、ご飯を食べたら、「A くんもそうっぽいね」っていうふうに同僚は言っていたんですけど、ああ、そうなんだあと思って。ある日、インターネットで、このF 航空の同僚が、中学校の親友のホームページを見つけて、それで、ああ、やっぱり、そうなんだ、って。——2004 年ぐらいとかですね。〔で、連絡を取って。〕はじめは、なんか、びっくりしてましたけど。いまでも、おたがい、それがわかったうえで、普通につきあいがあって。でも、おたがい〔好みの〕タイプも全然ちがうんで、そういう〔性愛の〕対象では、おたがい、ないんですけど。

全然知らなかったところからって、その2 回ぐらいですかね、考えてみたら。その身体検査で一緒だった子と、最初につきあった男性は、まあ、

〔予備知識〕ゼロだったところからカミングアウトっていう感じでしたけど。あとは、「こっちの世界」で、もともとそうだという前提で知り合っているんですね。

〔「こっちの世界」と言っても〕あまり、ぼく、〔ゲイコミュニティとか〕そういうのに〔は行ってないです〕。〔新宿〕二丁目とかも、ほとんど行ったことがない。人生で、でも、10 回ぐらいですか。〔二丁目は〕ひとりで行ったことが1 回もなくて、誰かに連れられて、なんか、あの交差点の、ここの、とか。〔最初のイメージは〕ああ、これが二丁目なんだぐらいの。たぶん行ったのが平日だったから、そんなに人もたくさんいたわけでもなく。はじめて週末に行ったときは、ああ、すごいいっぱい人がいるんだなあ、おおー、と思ったけど。疲れちゃうときがあるから、けっこう、あのノリに。〔たとえば〕カラオケかかるのは好きじゃない。あと、店子（みせこ）さんに気を遣ってしまう自分がいて。〔店から〕出てきて、気を遣って、あ、お金まで払っちゃった、みたいな。——数少ないゲイバー経験でも、そんなことが多いかな。自分のサービスをするときの反省点にはなるんですけどね。機内でも、お客さまが気を遣いすぎてくつろげないっていうのは、違うと思うんですよ。限られた空間だから最低限の気遣いはそれぞれを心地よくさせるとは思うんですけど、それで疲れを感じさせてしまうようでは〔ダメですね〕。

〔だから、ゲイとの出会い方は、すでに親しい〕彼をとおして、彼の友だち何人かと仲良くなって〔というかたち〕。ネットで誰かと知り合ったというのは、ほとんどないですね。で、〔身体検査で一緒だった〕彼も、すぐ、別の航空会社に入るんですけど、航空会社って、地上職員でもゲイのひと、けっこう多いので、それで、なんか横のつながりで、なにになに航空のだれだれさんと、じゃ、みんなでご飯食べるときに呼ぼうか、みたいな。

〔ぼくがゲイであることを知らないひとたちとのつきあいですか？〕大学〔のときの友だちと〕

の忘年会へ行ったら、幹事の男の子に、「きょうは、おれの高校の友だちの女の子、呼んだから、合コンね」って言われて。気が進まないなあと思いつつも、「あ、じゃ、楽しそうだね」みたいな感じ。最近、[ぼくがゲイであることを知らないひとたちとは] あまり遊んでない気がする。[だけど、ぼくがゲイであることを知ってる人とそうでない人とのつきあいの切り替えでは] あまり悩みとかも、とくになく。ま、たとえば、年上のひとと一緒にご飯を食べるか同級生とご飯を食べるかぐらいの違い。[自分のことを知られてないひとのどこでは] 多少は気を遣いつつも、でも、なんか、これがほんとの自分じゃないのに、とかっていうのもなく。でも、あと、年をとってくると、だんだん、なんか、むかしの友だちになかなか会わなくなりませんか？ まわりもみんな結婚をして。で、もう、みんな、だいたい、子どももいたり。忘年会とかじゃないと、みんな、なんかこう、出て来づらいというものもあり。だんだん疎遠になっていくかなと。まあ、だから、忘年会と、あと、夏、ちょっと飲み行こうかあとか、そのぐらいかなあ。そうすると、やっぱり、こっちの友だちは、結婚してないし、いつでもおたがい、けっこう時間があって、会いやすい。そういうのも、あるかな。

[大学の同窓生の誰かから「職場にかわいい女の子がいる」とかってふられたら、どう返すか、ですか？] 最近だと、「あっ、そう。でも、なんか、ひとりも楽しだね」って言ったりして。じっさい、結婚してない同級生もゼロではなく、ちょこちょこいるし。それを、問題視されることもなく。[それに] 大学のときに [ぼくが] 同級生の女の子とつきあってたりとかっていうのも、同級生は見ているから。

ストーカー事件と両親へのカミングアウト

[両親には] 言いましたね。ストーカーの被害に会い、それで、警察に行っただけです。最初はつきあってたんですけど。性格の不一致もあり、考

え方も違うし、別れたいという話を何度もしたんですけど、別れてくれず。別れたいが、ずうっと、もうほんとに、半年以上続いたんですけど。いろいろ問題が起きて、それで、まあ、警察に行っただけ。最初、近くの警察に行っただけですけど、なんか、「そんなのは、友だちどうしのイザコザでしょ？」みたいな感じで。「いや、じつは、自分は、その、同性を好きで、ゲイであって」とか [言っても]、いまいち、ピンときてなくて。「じゃ、また、なんかあったら来てください」みたいな感じだったんですね。ウーンと思って。で、新宿の警察に行ったら、説明をたいしてすることもなく、「あ、じゃあ、あなたはゲイで、相手もゲイなんですね」みたいな感じで。それは [警察にとっても] べつに、普通のことなんですよ。それで、とんとん拍子に、ま、スムーズに話は行って。

で、「警察が [問題の処理に] 出るにあたって、親御さんにも言っておかないと、警察も出られない」っていうことで [自分から] 親に言って、っていうカミングアウトでした。 「じゃ、親御さんも来てください」って言われて。警察に行かなきゃいけない。その車内で。そのときは、父親だけでした。 [父親もぼくがつきまとわれてるってのは] 知ってたんですよ。 [父親にその事件の説明をして、自分もゲイだっていうことを言ったら] まあ、「びっくりしたけど」って。「ああ、そうかあ」ぐらいでした。それで、警察に行っただけ、話を。で、そのあと、警察から警告を相手にして、それで収まっています。

母親に [話したの] も、そのときですね。 [母の反応は] 「あ、そう。わかった」みたいな。たぶん、母親は、でも、どっかで気づいてたと思うんですよ。それは、完全にぼくの勘ですけど。高校生ぐらいのときには、わかってたんじゃないですかね。 [息子のカミングアウトにも] 驚くことも、そんなに。ぎゃくに、驚かないのが、あ、驚かないんだ、と。ぎゃくに、びっくりしない反応に [ぼくのほうが] びっくりしたみたいな。

「えっと、いまのぼくは」なかなか、ひとを信用しないかもしれないですね。その一件があったというのもあるんですけど。日本——ほかはわからないですけど——、いろんな意味で、セキュリティってあまいじゃないですか。何をしようとしても、けっこう、なんでもできそうじゃないですか。あのクレジットカードの、電話で本人確認だって、生年月日と住所と電話番号だけとかで。そんなの、ちょっと仲良ければ、誰でも知ってるようなものだし。自分の本人確認をされているときに、それだけ？ ってびっくりでした。悪さしようと思えば、できちゃうんですね。

ゲイであることの苦労はなかった

「ゲイであることで苦労したことがあるか、ですか？」[しばらく考えたあとで] えー、あまりないですね。こんなもんだろうと思って。なんかあっても、まあ、一般的に、そんなもんだろうっていう感じで。あと、べつに、家族から「結婚しなさい」とか「孫の顔が見たい」とかも言われないうすし。会社として[も] そんな感じなので、ゲイであることによって、困るっていうこともないですし。

「男性のキャビンアテンダントの」多くは[ゲイですね]。はい。[ただ、公然とカミングアウトしてるひとは、少数。] あとは、つながりで。おたがいにはカミングアウトしてないけど、あいだにいる友だちが共通だという(笑い)。でも、なんか、言わないし、まあ、こっちも言ってないから、べつにあらためてあれでもないのかなっていうのか。なんかもう、言うタイミングを逃した、いまさらべつに、みたいな感じが多いですかね。

「会社側は、男性の客室乗務員にゲイが多いって」気づいてはいると思いますけど。うちのばあいは、本国人が直属の上司ですね。[そのひとは] まあ、男性の客室乗務員は、まず、ゲイなんだろうな、っていう目で見えてはいるかもしれないですが、べつに、そう見えても、だから、なに、ってわけでもないですね。[本国の社会自体で、ゲイ

にたいする差別っていうものを] そんなに感じたことはないですね。[ただし] 外資系の会社であっても、営業さんとかは日本支社の営業になるので、そうすると、ゲイにたいしてそんなに寛大なひとばかりでもないですね。

「でも、まあ、ぼくは」ゲイであることに悩みとかも、べつになく。自分が[多くのひととは] 違うんだなっていうのは、小さいときから気づいてはいて。でも、べつに、まあ、それは言わないほうが楽なんだろうなっていうのは、わかっていたけど。だから、なんでこうだったんだろう、とかも、全然思わず、まあ、言わなきゃいいや、っていう、ただ、それだけ。

「ひとに自分のことを言わないことが苦しくなったりはしないか、ですか？」べつに。だって、[誰だって、自分のこと] 全部をみんなに言うわけじゃない。それで、普通にこう、大学の同級生とか高校の同級生とかと、当時、話してて、で、多少、なんか、自分のなかで、つくって言ったこともあるけど、まあ、べつに、それがそんなにプレッシャーでもなく。

「タチか、ネコか、ですか？」タチですね。絶対に、いっつも、「ネコでしょう？」って言われるんですけど。べつにそれで困ったこともないですね。好きになったひとがタチだったから、というのもないですね。[好きになったひとは、つねに、ネコですね。] なんでですかね？[自然と] ネコっぽい子を好きになるんですかね。[選ぶ相手は] まあ、ネコで、細いひとが多い。——外見のことですか？(笑い) おない年か年上で、あまり子どもっぽくないひと。

「男らしさみたいなのに悩んだことはないか、ですか？」あまり悩んだことはないです。親からとかもべつに、言われたこともないし。

「これまでに同棲したことは」ないです。その機会がなかっただけですかね。基本的に、実家で、家もあり。便利といえば便利じゃないですか。[今後は] もしかしたら、ありうるかもしれないです

けど、いままでは、とくになかったですね。相手
がいて、一緒に暮らすことになれば、それはまた
べつですけど。そんなひとがいて、一緒に暮らし
たいなという夢を抱いてることもなく。まあ、淡々
と。そうなればそれを否定はしないですけど、自
分で。いま生きてるにあたっては、このままひと
りでいっても、べつに、いいかあ、って。[これま
では、関係は] けっこう、おしまいになる。けっ
こうというか、ぜんぶおしまいになってますね。

[老後とかって] あまり考えてないかな。なるよ
うになっていくかな、と思ってる。必死に貯金を
してるわけでもなく。けっこう、ひとりで家にい
ても、ぜんぜん苦じゃないし。[クルーの仕事は]
定年まで [働けます]。[H 航空のばあい] 日本人
は 60 [定年] です。

[HIV 感染予防への関心ですか?] 関心がない
わけではないですが、[HIV 感染予防のキャンペ
ーンのために] なにかをしてるわけでもないです
かね。検査とかに何回か行ったことはあるぐらい
で。でも、それも、会社の健康診断で、HIV の検
査もしなきゃいけないとか、それで受ただけで。
あと、自分がじっさい、そういう性行為をする
ときに、気をつけるとか、そのぐらいですかね。
[気をつけるって、具体的にはどんなことか、で
すか?] コンドームを使うとか、不特定多数のひと
と性行為をしないとか、あと、ハッテン場ってわ
かります? ハッテン場とかは行かないですね。そ
んな感じですかね。[検査の結果が出るまで不安だ
ったということもないです。] そういう心当たりも
なかったから。

辻仁成の『サヨナライツカ』がおもしろかった

[いちばん好きな本ですか?] いちばん好きだっ
たのは、辻仁成 (つじ・ひとり) の『サヨナライツ
カ』、という小説。70 年代かなんかのバンコクに
赴任した男のひとが、日本に婚約者を置いたまま
行くんだけど、むこうで出会う日本人女性と
恋仲になり、でも、やっぱり、婚約者を捨てられ

ず、結婚することになって、最後、ドロドロで別
れて、第 1 章が終わって。第 2 章は 90 年代から
2000 年代に入って、バンコクでまた再会をして。
で、そのバンコクの女のひとの最期を看取るみた
いな。むかしの、その 70 年代とかの東南アジアの
日本人というのがおもしろくて。いまって、外国
に住んでも、インターネットもあるし、物だっ
てすぐ送れるし、あまり離れてる感ってないじゃ
ないですか。メールはすぐ届くし、スカイプです
ぐ話せるし、[遠距離通信に] お金もかからないし、
って。70 年代って、ほんとに、なんか、外国はほ
んと、外国っていう感じで。そこを生きてるふた
りが、なんか、おもしろくて。なんか、いいな、
こういう時代も。不便な時代もいいな、と思いな
がら。——こんど、1 月 23 日に、中山美穂 [主演
で] ロードショーなので (笑い)。

[趣味ですか?] 手話を勉強してます。[仕事は、
月のうち] 12 日とかそのぐらいです。[時間があ
るから] 手話の勉強をしたり、なんか、ちょこち
よこと。[手話には] 日本語対应手話と日本手話と
あります。[ぼくが習っているのは] 日本手話です
ね。もともとは、G 航空にいたときに、もっと日
本のお客さまの役に立ちたいと思って、それで日本
手話を勉強しようとしたんです。

[仕事で本国に行っても] ぜんぜん、いまは [街
を歩かないですね]。空港ホテルに滞在しているの
で、ホテルからほとんど出ず。ヨーロッパが特別
好きというわけではないので。[あちこち行きたい
っていうので、客室乗務員に] なるひと、多いで
すね。[ぼくは] 仕事自体に興味をもって就職した
ので。休暇は日本国内を旅行してる人が多いで
すね。

[スローライフが好きか、ですか?] あまり、う
るさいの、好きじゃないですね。クラブとか苦手
です。クラブとか、人生で、ほんと数回しか行っ
てないです。あの大音響が嫌で。ライブもあまり
好きじゃなくて。ライブのスピーカーからの音っ
て、すごい大きいじゃないですか。[好きな曲?]

最近聞いているのが、ドラマとか映画のサントラとか。ミュージカルも、あまり見ないですね。お芝居とか、なんか、見に行ったら楽しいんだけど、最近に行くこともあまりなく。

〔最近見たテレビドラマですか?〕いま、「神の雫」の再放送を、もう一回、見だしたりとか。〔TBS金曜ドラマ、観月ありさの「おひとりさま」も〕チラッと見は見たけど、なんか、むかしに比べて、必死にドラマを見ることもなくなって。まあ、やったら見ようかな、とか。それぐらいで。

〔BL（ボーイズラブ）とかは〕読んでないですね。マンガは得意ではなく、あまり読まないですね。家にあったマンガが『キン肉マン』ですからね。なにが楽しいんだろう、と。あと、『こち亀』も読んでました〔けど〕。

〔化粧水を使っているか、ですか?〕でも、世間の一般の男性がどのぐらい化粧水をつけてるのかと思いますよね（笑）。〔ぼくは〕ファンケルの小さいやつ。持ち運びが楽で。それで、ファンケルの小さいやつを通販で。飛行機に乗ると、すごい、カサカサカサカサ。手とかも、すごいカサカサです。だから、いまも、すごい付けてんですけど。ハンドクリームを持ってると、「なんで持ってるの?」って言われるのと、あと、夏場、リップクリームを付けてると、「なんで、夏に付けてんの?」って。

人生のなかでいままで3回頑張った

〔ぼくは〕飛行機が好きだったのがよかった、自分にあっただのかな。就職活動をするときも、その点では苦労もなく。会社って星の数ほどあるじゃないですか。当然、受験をぜんぶはできないので、絞っていかないと受験できないじゃないですか。まわりの同級生は、どの業界を受験しようか、から迷っていて。だいたい8割ぐらいは、みんな、やりたいことも、そんなになくてなので。選ぶところから迷っていたけど、ま、そこで迷わないですんだ。そこで合格をもらえるかは、また別だけ

ど、とにかく進む方向が決まっていたのはよかったかなあ、と思う。

〔はじめてバイトに〕入ったとき〔職場で〕最年少だったので、みんなよくしてくれて。〔バイトは〕もうそれだけ。空港とB航空の予約センター。で、もう仕事で、だったから。

〔人生のなかで〕いままで頑張ったのは、就職のときかな。就職活動は頑張った。あとは、できる範囲でいいかな、っていう人生を〔おくらせてます〕。

あと、免許証も頑張った。教習所をさぼってたんですね。〔教習所に〕行くのが嫌で。いまと違って、免許証の教官、すごく怖かったんです。いま行くと、すごいやさしいらしい〔けど〕。おない年の同期が、1回、更新を忘れて免許が失効してしまって。で、しばらく取ってなかったんだけど、おうちの事情で取らなきゃいけなくなって、もう一回、運転免許を取りに行ったら、「教官もスタッフも、みんな感じがよくて、もう、サービス業になって、びっくりした」って言って。やっぱり、当時って、感じのよくない人もいたりして、お金払ったうえに、こんな怖い思いをしなければいけないなんてと思って、しばらく行かなかったんですよ。で、ある日、そういえば教習所って期限いつだろうって、逆算をしたんですよ。そしたら、あしたから毎日行っても、けっこうギリギリっていう日で、それからは毎日行きましたね。それも頑張ったけど。

あともう一個、頑張ったのは、大学の2年生の一般教養で、古文を取ったんですよ。興味があったわけではなく、たまたま、仲いいみんなで、「じゃ、古文、この時間あいてっから取ろうか」って取ったんですけど。考えてみたら、古文、すごく嫌いだったんですね。で、前期のテストが30点で。これも逆算をすると、つぎ、百点ちかく取ったところで〔評価は〕Cだと。3年生まででフルの単位を取ってれば、4年生はゼミと卒論だけで、ほとんど学校に行かなくていいのに、1単位でも落としていると、それを受けに行かなきゃいけな

いし、それを落とす可能性があるから、バックアップで2, 3を〔余分に〕受けておかなきゃいけないじゃないですか。で、そのときは、もう、教科書、丸暗記しました。本文と訳をとにかく暗記して、全然わかっていないけど、それで、テストが……。でも、その教授からしたら、おかしいよね。カンニングしたと思われてもおかしくないよね。30点が、98点とかだよ。絶対、疑われると思って。人生、三大頑張った。その程度でした。

ピアフレンズにかかわるようになったのはごく最近

〔ピアフレンズにかかわるようになったのは〕ほんと最近ですね。〔きっかけは、ぼくの〕友だちが〔ピアフレンズ代表の〕石川大我の友だちと仲がよくて、その延長で。そのあいだの友だちが、ご飯を食べるときに、マイレージの2倍ポイントが付くお店で、「人数が多いほうがいいから」って言って、たまたま駅で会った石川を、「1人増えれば、4,000円分、さらに倍のポイントが付く」というので呼んだらしく。で、みんなでご飯を食べていて、「えっと、こんど、ピアフレンズがあるんだけど、来てみない？」って言われて、「いやいやいや、それ、10代、20代向けのイベントでしょ？ 30代だから行かないよ」って言ったら、「じゃ、手伝いに来て」と言われて。時間もあつたから手伝いならって、行きだして。〔行ったら〕楽しかったですね。〔ピアフレンズは〕ゲイとバイセクシャル男性〔の集まり〕ですね。タイトルが「10代・20代ゲイとバイセクシャル男性の友達づくりイベント」なので。

〔石川大我のことを知ったのは〕去年に、友だちとみんなで、しゃぶしゃぶを食べてから。〔それ以前に彼の〕本は読んだことありましたね。でも、本を読んで、おわり、です。

〔ピアフレンズの参加人数は〕多くて100人強。この前、66人でしたね。〔ゲイ男性が大勢集まった場所ははじめてでしたが〕あまり、でも、〔だか

らとって、特別な感動は〕なかったですね。なんだろう、〔ぼくは〕虐げられて生きてる感も、べつに、毎日の生活で味わっているわけでもなく。なんかこう、自分がゲイだから、すごい、押さえ付けられてるとかってのも、べつに、なかったの。イベントを滞りなく運営するためと思って〔参加してる〕。ほんとにもう、仕事としてきっちりやろうって思ってます。会場の設営をだいたいするんですけど。あとは、お金の清算だとか。クレームの処理とか。以前、隣の会場からクレームがあつて。ピアフレンズの参加者が「間違えてこっちにくるから、どうにかしてほしい」と。前に出てなにかをすとかではなく、裏方的な仕事をする事が多いです。〔いままでに裏方をやったピアフレンズの集まりは、お台場での〕夏のバーベキュー。高松。高松で地方開催をしたんですね。あと、札幌。下北沢。池袋。あと、NPO設立記念パーティとで、6回ですかね。

〔自分が若いときには、そういう場って〕なかったですね。あつたら、変わってたらどうなとは思いますが。いまの自分とは、また、違う感じだったと思うんですが、でも、べつに後悔はしていませんね。まあ、それはそれで。

〔ピアフレンズの〕地方開催はいろいろなところからうちでもやってほしいっていう声をいただくんですよ。全部の場所でっていうのはなかなか難しいんですけど、声に応えられたときはうれしいですよ。当事者どうしのつながりが限られてる地域も多いので、地方開催ってすごく大切だと思います。スタッフも、ほんとに、濃い時間を過ごしてますよ。地方ではどうしても時間が限られるので、そのときばかりは睡眠時間を削って、できることは全部するっていう。その地域の当事者グループのひとたちと交流会とかもあつたりして。

〔あるいは〕札幌〔へ行ったときは〕テレビ塔をレインボーにしたり、パレードにも参加したりとかで。あとは、ちょっとした空き時間を作ってその土地のおいしいものを食べるのもはずせないで

すね。けっこう忙しいですけど、ほんとに充実しています。[ピアフレンズでは] ぼくとしては、ワーッというよりは、淡々と仕事してる感じ。お手伝いをして。ピアフレンズで参加者どうしが友だちになったりとか。「いままでゲイとかバイセクシャルに会ったことがないです」っていうひとたちも、けっこういたりとかするんですね。なかには、やっぱり、悩んでる子とかもいるじゃないですか。そういう子たちが当事者どうしで会って、楽になったりとか、友だちになってるのを見て、ああ、よかったな、とは思いつつ、仕事として、きっちりやろう、っていう [スタンスです]。

つらくないって言ったらウソかな—ある 20 代ゲイ男性からの聞き取り—

研究協力者：斉藤幸太(立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士前期課程)

神谷悠介(中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程)

聞き取り概要

福岡県生まれの 20 代ゲイ男性のライフストーリー。匿名希望の C さんは、1989 年生まれ(聞き取り時点¹で 21 歳)。大学生である。

「同性を好きである」という意識は、同性に惹かれ始めた当初から明確に自己定義されるものではない。「同性を好きである」と自覚する以前から、家族や友だち、教師などのさまざまな人間関係など社会からの影響を受け、同時に家族や友だち、教師などのさまざまな人間関係など社会に影響を与えながら、形成されていく。C さんの語りは、「同性を好きである」ということや「女っぽい」という周囲とは異なる属性が人間関係を築いていくなかで“壁”となっていたが、“壁”を感じることはないゲイの当事者同士の関係のなかで自身のセクシュアリティを再構築していつていることを示している事例である。

C さんは「同性を好きである」ことを漠然と意識し始めた中学時代、“たまたま男子を好きになった”、“単なる憧れだった”のかもしれないと、“それについて深く考えないので、悩んでいなかった”。高校時代になると、男子生徒の女子生徒を恋愛対象とした会話への興味のなさから、C さんの同性への意識は「周囲との違和感」として現れ、

次第に異性愛者に対して“壁”をつくるようになる。その“壁”は人間関係を“ぼささり切る”という方法として端的に表れている。C さんの異性愛者の友だち関係には継続性がなく、“予備校のときの後の友だちとしか付き合いはない”。ゲイの友だち関係を築いていくなかでも同様に、大学やミクシィでつながっていた異性愛者の友だちとの関係を“バサッとまた切って”，ゲイの友だち関係へと“シフト”している。

C さんは、はじめて「同性愛」という言葉を聞いた小学生のときから、同性愛に対する否定的な文化で育ち、それは大学生活を送る今日まで続いている。自身の性的指向を自覚する以前の小学生のときから、クラスの男の子がキスをしている出来事を“これはダメなことなんだ”と学習し、大学の飲み会の際にも“男同士は気持ちが悪い、地獄絵図だ”と否定的な言葉にさらされながら生きている。また、C さんのしゃべり方やふるまいが女っぽいことに対して、“イコール男の人が好きみたいなレッテルを貼られ”，そのことによって周囲に同性を好きだと“バレるんじゃないか”という不安を抱えながら生活してきた。このような同性愛に対して否定的な環境のなかで育ちながらも、C さんは「すこたん」のイベントに参加し、ゲイの友だちづくりを積極的におこなっていく。また、「親へのカミングアウト」をテーマにしたイベントで、みんなの前で親へのカミングアウト経験を話す同年代の人に影響を受ける。こうした友だち関係やカミングアウトに関するロールモデル

¹ 聞き取りは、2010 年 2 月 5 日、東京都新宿区の喫茶店でおこなった。聞き手は、斉藤幸太、神谷悠介。斉藤幸太が音声おこしをおこない、福岡安則・埼玉大学教授の指導を仰ぎながら、語りのまとめをおこなった。

を獲得していくなかで、浪人時代に一目惚れをした同じ大学の友だちにカミングアウトと同時に告白をしている。

現在は「すこたん」のスタッフになり、同じスタッフであるゲイの友だちと“悩み”を共有していくなかで“壁”のない関係に支えられながら、地方の子にも見てほしいという思いで、ゲイに関することを“ネタ”にしながらブログを書いている。友だち関係については、ゲイの友人関係が安定してくるにつれて“地に足がつき”，人間関係を断ち切ってきたことに対する後悔が現れ，“ノンケ生活も頑張ろう”という変化が生じている。就職に関しては“人とかかわる仕事に就きたい”が“これまでの人間関係が居心地よくないことが多かったため”，“人とかかわらない仕事にしようか”と将来への不安を示している。

自分はまわりのみんなとは違う部類なんだ

21です。〔出身地は〕福岡県です。〔福岡で暮らしていたのは〕予備校までです。大学進学で、上京。〔いま〕大学2年です。〔現在は〕一人暮らしです。

〔家族は〕父、母、姉と祖母です。姉がもう結婚して実家から出てて、実家にはもう子どもがいない状況です。〔父は〕公務員。母は専業主婦です。

〔自分が同性愛であると自覚したのは〕ちょっと曖昧なところもあるんですけど、けっこうきわどいけど、中2ぐらいから、ちょっとぼんやり、そんな感覚があった感じはします。中3のときには絶対にそうだったと思うんですよ。というのは、〔中3のとき〕クラスに気になる〔男の〕人がいて…

…。でもまあ、中2のときに女の子に告白した記憶があるので（笑い）、なんか〔そのへんが〕境目かな、みたいな。

〔中3のときの気になった人ですか？〕なんだろうなあ、外見じゃない感じがある（笑い）。やっぱし、性格に惹かれた感じですね。見た目はちょっとぼっちゃりだったんですけど、とりあえず、やさしくて明るいみたいな感じでしたね。〔でも〕中学のときは、それについて深く考えないで、あんまり悩んでなかった気がします。ちょっと昔のことだから記憶が曖昧になってるところもあるんですけど、その時点ではまだ、自分が同性愛者だみたいな感じには思ってなくて、たまたま〔男子を〕好きになった、でもなんか、ほんとうに、これが好きっていう気持ちなのかな、みたいな感じだった気がしますね。

〔これが最初のきっかけかどうかは〕すごく曖昧なところがあって、中1のときには、部活の中3の先輩の男性なんですけど、その方がすごい……。まあ、でも、それは〔単なる〕憧れだったのかっていうのもあって。なんかそこらへんから、なんていうんだろう、兆しみたいなのかなっていうのは、ありますね。でもまあ、中3のときは、ほんとうにもう好きだったんだな、ってなりますね。

中学のときのその人は、中3とかだったら、自然ななりゆきで、行事とかでけっこう一緒にいる時間が増えていって、自然に好きになっていった感じだったから、いわゆる自然な感じだけど、高校に入ったら、新しい環境になるじゃないですか。新しい人に囲まれることによって、その、目で追うのが、女性じゃなくて、男性が多かった

から、やっぱそういうふうに、自覚ができてきたというふうに、いま考えてます。

あとなんか決定的だったのは、高1のときに、宿泊訓練じゃないけど、最初の、学年みんなで集団行動の練習しに2泊3日くらいで、青年の家に行ったことがあったんですけど、そのとき、夜とかになって、クラスの女の子の話が始まったんですよ。クラスの女の子の名前をぶあーっと書いて、この女の子の顔はなんちゃらかみんがやってて、それを自分はぜんぜん興味ない。〔その仲間に〕入れない、なんかさみしい思いをしたのは覚えてます。〔そういうんで〕高校のときは、誰か〔特定の男子を〕好きになるとかいうのじゃなくて、逆に、〔同級生の男子生徒たちに〕囲まれて、なんか違うなっていうので、違う意識があったみたい。自分が誰かが好きだから自分が同性愛者だっていうよりかは、なんかまわり〔の男子〕は女性の話をしてる、それにあんまり興味ないから、自分は違う、違う部類なんだ、って思っていました、ぼくの場合は。

その高校の時期っていうのが、いちばん辛い時期で、いちばん訳わかんない時期で、とにかく人を好きになれないみたいなそういう時期があったんですね。絶えず違和感なり、〔自分はまわりの〕人とは違うんだっていうのは、高校のあいだはずっとありました。

〔同性への性的指向を意識することが学校の成績に影響したことがあるか、ですか？〕それは逆に上がったんですね。なんかもう、他の人とは違うなら、勉強でやっちらるわ、みたいな感じだったので。負けてらんないぞー、のほうになってました、

自分の場合は。勉強では負けない、みたいな感じになっちゃってましたね。

これ恥ずかしいんですけど、一目惚れみたいな

それで、そのあと、大学受験に入っちゃうんですけど、そのときに1年間予備校に通ったんですね、浪人なんですけど。そのときにまあ、新しい環境で、好きな人が、それはもう、絶対に好きになった人と自分では思ってるんですけど、好きな人ができて。けど、それは、恋愛っていう感じにはならなくて……。

予備校のときに〔好きになった人ですか？〕これ恥ずかしいんですけど、いちおう、なんかまあ、一目惚れみたいな(笑い)。予備校のあいだは、しゃべる機会はあるななかったけど、最後らへんにちょっと親しくなってる。だんだん進路がこう狭まってきて、っていうふうに、みんな決めるじゃないですか、どこに行くんだみたいな。それでたまたま同じコースになって、それで仲良くなって、最終的に同じ大学を目指していたので、ちょっと親しくなってる、って感じですかね。親しくなり、しゃべったりはしてました。見るだけじゃなくて。エヘヘへへ。

イベントでのゲイの友だちとの出会い

〔ゲイの男性にはじめて会ったのは〕去年の4月18日です。きっかけは、「すこたん」というイベントに参加しました。とにかく行くまでに、緊張、緊張、みたいな。そのときに、何人かのひととはアドレス交換とかはしたんですけど、まあ最初はなかなか……。そのイベントが終わってすぐ帰っ

たのもあったけど。自分のなかでもちょっと怖いっていうか、不安とかもあるから、アドレス [交換], 同年代の人 2, 3 人くらいとしたんですけど、まあ特には、つながらない感じでしたね。

[いま、ゲイの友だちで仲いいひとは] います。[恋人は] いないです。

[仲のいい友だちは] 1 人, 最初に「すこたん」で会った人とつながって。そのあと、次の 5 月、「ピアフレ」に行ったんですね。そのときに再会してそれから仲良くなった人は、つながってますね。いまは、話すことが多い。喫茶店でお茶したりとか。誕生日パーティとかしましたし。自分たちの場合は、「すこたん」のスタッフになってるんで。仲いいのが 3 人いるんですけど、イベントを企画したりとかしてるんで、そのイベントの話をしたりするとか。

[ゲイの友だちができる前と後では] めっちゃ変わりましたね (笑い)。とりあえず、人生が楽しくなった、みたいな感じですかね。なかなかホンネがしゃべれないから、ノンケの世界だと。そういう意味でわかりあえる人がいるというのは、心強いですね。うん。

なんか、自分がゲイであるっていうことについて悩んでた部分がすごくあったから、そういうのがやっぱ、同じ仲間として一緒にいれるだけで、それだけでだいぶちがう。もちろんイベントが楽しいっていうのもあるけれど、そういう、一瞬的な、刹那的なことじゃなくて、なんかつねに心の支えになってくれる部分がすごく……。すごい自分は悩んできたから、自分が同性愛者ってことで。そういう意味で、それがなくなっただけで……。なんていうんですかね、

ノンケの世界と自分たちの世界、2 つの世界があるみたいで、ほんとに新しい世界ができたみたい。ほんとに自分らしくいられる世界ができたっていう意味で、すごい楽しい。具体的な何かが楽しいとかじゃなくて、もうほんとうにそれだけで、自分らしくあれるときが増えたっていうのは、すごいうれしくて。

[どういうときに心の支えを感じるか、ですか?] むずかしいな。自分の場合は、異性愛者と同性愛者っていう区別、その違いがあるだけで、もうすごく壁を感じちゃうんですね。あつ、違うんだ、みたいな。この人たちとは違うんだ、みたいな。いちばんやっぱ、異性愛者の人と付き合いづらくなって感じるのは、恋愛の話とかになったりすると付いていけなかったりするし。でも、そういう話で盛り上がっちゃうところとかもあると思うから、仲良くなると、絶対避けては通れない道なんだなっていうふうに、自分のなかで勝手に思い込んでいた部分があったりして。そういう意味で [ゲイの友だちだと] その話を含めてできるのは、すごい自分は壁がないっていうふうに感じれるんですね。なんか自分のことを話せないのは、自分は嫌で。自分ではできれば自分のことを伝えたいし、相手のことも知りたいっていう部分もあったりするので。自分の恋愛の部分もやっぱ大事な部分だと思うので、そこも話したいし、やっぱ相手にも話してもらいたいけど、異性愛者だと、そういう部分をどうしてもクローズットしなくちゃいけない部分があったりして、自分が入っていけないんですね。そういう意味で、普通に、あの男の人のあそこがいいとか言える関係っていうのはすごい、ああ

一、こんな世界もあるんだ、自分以外にほんとに男の人が好きな人がいるんだっていう、その時間を与えてくれるだけで、なんか友だちがいることによって、それだけでも、ほんとうに、だいぶ自分の意味を感じるというか、そういう部分はありません。

ノンケの世界との付き合い方の変化

〔異性愛者に対する壁は、いつできたか、ですか？〕 さっき言ったように、高1のときの、集団行動のお泊まりじゃないけど、そういう合宿みたいなときに、どうしても、夜になってみんな話をしたがるときに、自分はいれないのが、やっぱ、それだし。さらに、そういう話には入れなかったとしたら、なんか自分が“ひよっとしたら、おまえ、男が好きなんじゃないか”みたいなことを思われるんじゃないのかなっていう恐れが、つねにあった気はします。よく世の中で、その、〔男が〕男の人が好きとかは、なんかすごい否定的な意見とか情報とかあったりするんで、なんかバレちゃいけないみたいな感じで、そういう意味で壁がどんどんどんどん〔できていく〕。やっぱ、自分のことは言ったらいけないし、〔もし、ありのままの自分を〕言ったら、たぶんまた、どんどんどんどん相手に外されていっちゃう、仲間にしてもらえないじゃないかっていうね、思いはありました。そういうのでどんどん壁ができていったんじゃないかなって思います。

〔家族から男はこうあってほしいみたいな期待を感じたことがあるか、ですか？〕 いま、テレビでいわゆるオネエキャラが出てくると思うんですけど、そういうのに対して親が意見したっていうのは聞いたことは

ないんですけど、自分としてはまあ、一人暮らししてるから、たまに帰ったときに、なんか、「いい相手見つかったの？」みたいな感じで聞かれると、“あっ、ごめん、〔ぼくが好きになるのは〕男だよ”って感じの部分は、〔言えないので〕絶えずちょっとつらい部分がありますね。「孫の顔が見たい」とか〔そういうことを言われたことはない〕。まだこの年だし、まだ結婚するとは思っていないのも、学生だからあるので、そこまで来てないけど、なんかでも、そろそろ、1回くらい「付き合ってるよ」ぐらいのこと言わないと、両親（むこう）としても心配するんじゃないかって。“この子、大丈夫なんだろうか”って〔思うんじゃないかっていう〕そんなのは、絶えずあるので、そこでもまた、報告できないのはちょっとつらくなって、親に後ろめたさみたいなのはありますけど。

〔異性愛の友だちとの関係ですか？〕 こう言ったらあれなんですけど、もう、バサッと切っちゃってるっていう部分がある。だから、予備校のときの後の友だちとしか付き合いはないというか、わりともうそこは分けて考えちゃってるので。

いちおう成人式は出なきゃってことで、去年、成人式に行ったときに、福岡に帰ったりはしたんだけど、そのときとか、ほんとに中学卒業してまったく会ってない友だちに久しぶりに会ったりしたんですけど。まあ、酔ってたせいもあると思うんですけど、なんかわりと、自分は昔から男っぽい人ではなくて、どちらかというとなんか女っぽいところもあったりはして、うん。べつに言葉遣いがそうだっていうわけじゃないけど、ふるまい方もべつにそんなに変わらないと

思うんですけど、まあいわゆるオカマじゃないけど、からかわれることはあつたりはしたんですね。すごく嫌だったんですけど、そういうところもあつたりはして、それも引きずって、成人式のときとかは、なんかまあ、「[おまえ、まだ] 童貞だろう」みたいな類は言われて。それは、その、普通に自分は彼女いるうんぬんの話だったから、同性愛者についての偏見という感じではないんですけど、なんかやっぱ、その自分の女らしいっぽいところをみて言ってるのはあつたりして、自分はそれはすごい嫌でした。

[でも、当事者の友だちができたことで、ノンケの子との接し方が変わったっていう部分も] あります。自分は、去年の4月に [ゲイのひとと] 出会って、ほんとに仲良くなって、除々に仲良くなって、6月くらいからもうだいたい毎週その3人でずっと会ってるんですね。こっちの友だちができると、なんか、こっちの世界だけで生きようと思って、逆に、ノンケの世界を切ったんですね。大学の友だちとも、めんどくせえっと思って。新しくできた友だちにシフトしたほうがいいんだって思って、一回、大学でできた友だちのほうをバツて切っちゃったんですね。切っちゃって、すごいそのあと後悔して。新しくその友だち、ゲイの人と出会ったときに、自分のなかですごい葛藤があつたりして、まだその4月から5月っていう、「ピアフレ」で [ふたたび] 会うまで、一回もゲイの人に会わなかったんですね。連絡は1人の人とはしてたんですけど。てか、むこうちょっと年上の方だったんで、なんか自分が悩んでるっていうのを知ってて、ちょこちょこメールしてく

れたって感じだったんですけど。でも、自分、5月くらいに「ピアフレ」で、ちょっと仲いい人ができて、すごい楽しかったんですね。それで5月から6月のあいだに、そのメンバーで飲み会しようよって話があつたんですね。でもなんか、5月から6月のあいだは、自分のなかで悩んで。なんで悩んだかっていうのは、すごいちょうど移行期っていうか、シフトしてたころだったんですけど、それでなんか1ヵ月くらい学校行かなくなったりして大学をさぼったりして。そしたらなんか大学の友だちはメールをしてくれたけど、すごい、がん無視して。そのあとまた、夏休み終わってから普通の生活に戻ったんですけど、なんかちょっと修復しがたくなっちゃって。バサッと切っちゃいすぎて。で、後悔とかあつたんですけど。

最初にそういうふうにごっちの新しい友だちができたときは、ごっちに一回シフトして、バサッと切っちゃったんですね。でも、だんだんごっちの友だち関係も安定してくるにつれて、ほかの付き合いも割り切れるようになってきて、逆に、あっ、なんであのときばっさり切ったんだろう、べつに中途半端でも、もうちょっといい関係が続けられたのに [って] ほんとうに後悔しだして。やっといまは、世界っていうのは、ごっちの世界だけじゃないし、やっぱ、ノンケの世界もちゃんとやらないともったいないなって、やっと思えるようになって。それで最近、もうちょっとノンケ生活も頑張ろうって、やっと思えてきましたね。なんか地に足がついたっていうか。

[大学を休んでたときに友だちからメールをもらったときは] チョー嬉しかったで

すよ。やっぱし、こんだけ心配してくれるし、みんなやさしいんだなあとか思ったけど、そのときは自分のことで精一杯だったから、相手の気持ちに応えることはできなかったんですね。自分の気持ちのほうを重視してしまいました。

高校のときは人が嫌いだった

[高校生のときですか?] 自分の場合はすごい極端なんです。とにかく人が嫌いだったんですよ。高校生のあいだはずっと。とりあえずなんか、まわりの人は違うなっていう意識ばかりがあって、あまり心が開けないみたいな。一人で閉じ籠もって、っていうのもあって、なかなか友だちと仲良くできなくて、クラスでもちょっとさみしい存在みたいになってました。

自分の場合は、[まわりのひとが] ぜんぜん自分と違う存在に見えたんですよ。なんかやっぱ、すごい自分って他の人とは違うんだなっていう、なんか傍観者視線になって、自分から人の輪に向かえないっていうか。むこうはウェルカムしてくれるけど、なんか自分が、無理、無理、みたいな。もちろん[それは、自分の性的指向が関係しています。] やっぱみんなは普通に、男は女が好き、女は男が好きっていうのは、すごい当たり前のようになっているけど、自分はそうじゃなかったんで、そのことによってなんか違うんだ、この人たちとは、みたいな感じだし。もし自分が、同性が好きと言ったとしたら、絶対に違う目で見られるなっていうのがあったので。なんか、とりあえず、[まわりの] 人とは自分は違うんだなって。[人が] 嫌いって言うと、なんか漠然としていると思うんですけど、好きにな

れないっていうか、違うんだっていうので、仲良くなろうとも思わなかった。

[そのとき誰かに相談は] まったくしなかったです。高校のときは一人で抱え込んで、とりあえず卒業してやるぞ、みたいな。卒業して嬉しかったのは覚えてます。やっとなんか解放される、みたいな。[相談できなかった理由ですか?] やっぱ、ひとつは、とりあえず人に言うことによって、仲間外れにされるっていうか、おかしいって言われるのが怖いっていうのがあったのと、もうひとつは、そう思ってるからこそなんですけど、そう思ってるから仲良くなれないから、さらに言えないみたいな、悪循環。仲良くなれたら言えたかもしれないですね。ほんとに仲良くなったら言えたかもしれないけど、そういう関係は築けなかった、高校のあいだは。親友と呼べる人はいなかった、みたいな感じがありました。

小学校のときに「女っぼい」と言われたことも

[ぼくは子どものときに、男の子の遊びになじめないっていうのはなかったですね。] 自分のまわりにそういう子いたんですけど、自分はそのころへんは意外と普通でしたね。でも、なんだろう、どうしても、なんか、しゃべり方とかふるまいが、やっぱ、女っぼいところがあつたらしいので——自分はそういったつもりはないけど——、そのころへんで、なんか、女っぼいところとかは絶えず感じてました。[女っぼいって言われたのは] もうたいぶ前で、小2、3くらいです。[でも] そのころはあんまり自覚がないし、あんまり覚えてないんですけど。中学くらいになると、なんかそういう[のだと]、イ

クール男の人が好きみたいなレッテルを貼られるじゃないですか。なんかちょっと、おまえは男の人が好きなんじゃないかみたいな、そういうのが結びつくっていうのが、すごい嫌。結びついて、バレるんじゃないかっていうのが、怖かったのは覚えてます。

でもなんか、年齢を重ねるにつれて、だんだんそういうことも言わなくなりますよ。まあ、女っばいとかは、小学校のほうがいっぱい言われた気がしますね。中高だったら、それもちょっとしたやさしさの表れみたいな、女っばいのもなんかやさしいからこういうふうにしてるんじゃないかなってみんな思ってるから、[言われることは]だんだん少なくなった感じはしますし、大学とかだったら、べつにほとんど言われたことはないですね。

同性愛への偏見を耳にするとき

[はじめて同性愛とかホモとかゲイっていう言葉を聞いたときですか?] とりあえずその「同性愛」っていうのも、よくないなあっていうのも、たぶん小2くらいのときに、なんかクラスの男の子同士がキスをしているのを見て、それに対してみんなが言っていたのは、すごい記憶にあります。

[そのときはまだ自分の性的指向を自覚してなかったから] それに対して、批判とかじゃなくて、これはダメなことなんだっていうそういう一つの情報として考えてた気がします。あっ、こういうことはダメなんだな、きっとほかの人が見たら、やっぱ異様な光景に見えるんだなって、感じですね。自分はそれに対して気持ち悪いとかじゃなくて、よくないことなんだ、って感じですね。

高校とかは、もう人とかかわってないので、とくにそういう思い出が逆がない、まったく、みたいな(笑い)。なんか、大学に入って、この前、飲み会とかに行ったときに、なんだろう、「男同士は気持ち悪い」みたいな話になって、「そういうのは地獄絵図だ」と言う人もいたりとかして、その場に自分はいたんですけど、ショックだったのは覚えてます。ネタにされてました。

あのときの自分はいまの自分に必要だったかな

[いま、高校のときのことを振り返ってみて、どう思うか、ですか?] なんて、あのときもうちょっと心[を]開けなかったかなっていう後悔はあるんです。けど、あのときの自分はいまの自分に必要だったのかなと思って。いまの自分になるためには、じゃないけど(笑い)。やっぱ、それでいろいろ悩んで、考えたところもあるし、人の痛みもわかるようになったってところもあるから、あの経験はあの経験でよかったんだって、だいたい思えるようになってきました。それでもつらいときはありますけど、思い出せば。

いま、仲いい[ゲイの]友だちは、みんなけっこう高校のときとか悩んでる人だったりするんですよね。だから、そういう共感する部分がなかったら、たぶん仲良くなれなかったんですよね。それで、いま、自分の友だちがすごく好きだから、そういう意味であの時期は必要だったし、もしあれがないと、いまの自分のまわりについてくれる人は、一緒にいられないから、っていうのと、過去は変えられないから、もう、いまを頑張るしかないっていうのが、スタッ

フの思いですかね。まわりの人がいま好きだっということと過去は変えられないから、そこを悩んでもしょうがないっていうふうに、だいぶ整理ができはじめていますね、自分のなかで。昔は、過去に戻りたい、戻りたい。戻れたら、なんであのとき、ああしなかったんだろうって、その思いはあったけど、最近は大いぶ整理もできてきて、あのときは自分なりにやってたんだ、頑張ってきたんだから、それはそれでいい経験になったんじゃない、でも、あんな思いはもう二度としたくないから、いまを頑張るしか方法はないよね、っていうふうに言うようにしてます。

いままで〔ノンケの友だちは〕バツババツサ切っちゃってきたこともあるから、やっぱこれからは、長く深く付き合っていけたらと思ってますね。いろいろと思い出を共有したいというか。〔そのためには〕制度的な部分では、なんかもうちょっとこっちの世界に対する偏見とかがなくなっていけば、いまの友だちとも仲良くなれるし、他の友だちともどんどん仲良くなっていけるし、なりやすい部分はあると思いますね。漠然としか考えてないけど、なんていうんだろう、もっと寛容な世界になればいいなあとかいうのはありますけど。

進路の悩み

〔今後の進路ですか？〕悩んでいます、いろいろ。いままでのところは、進学、進学だったので、とくに悩んではないんだけど、これからは、すごい、いま、悩んでいますね。最近、やっぱ、人間関係の難しさっていうのをつねに感じていますので、仕事でちゃんと働けるのかっていうのは、すごい不安

な部分がある。どうしても、その、つらく感じてしまう、人間関係が居心地よくないことが多かったんですね、いままではわりと。なので、ちゃんと人間関係を築いたうえで、自分のやりたいことをやっていけるって環境を、これから整えていけるのかっていう不安があるので、人とかかわる仕事に就きたいのはあるのに、なんか、やれるのかなあっていう不安もあったりして。それでなんかこう、就職の範囲をどんどん狭めてる部分があるんですけど。まあ、いまから、そういう意味も含めて、このままじゃいかんと思って、人間関係の練習をしなくちゃいけないなあって思ってる最中です。

〔狭めちゃうというのは〕できるだけ人にかかわらない仕事にしようかなみたいな…。〔つまり〕絶えずこう、議論、議論、すごい議論したりとか、そういうなんかアイデアを出しあったり、チームワーク大事だよみたいなじゃなくて、なんか、もうちょっとコツコツと一人でデスクワーク的な、できるかぎり人と〔かかわらないですむ〕そういう職業があればいいのかなあ、とか思っちゃってる部分がありますね。でもなんか、聞いた話とかでは、だいぶLGBTに対してすごいフレンドリーな企業とかもあるじゃないですか。だからまあ、そっちのほうに……。ほんとに自分がやりたい仕事か〔別のところに〕あるかもしれないけれども、まあ、そういうふうな面も考慮するようになるのかあって。

でも、それで決めるのは、なんか自分の人生にとってはたしてそれがいちばんなのかっていうのはあったりはするので、まあ、ほんとうに自分がやりたいことがあるかもしれないから、それなら自分は変わってい

くしかないところもあると思うから、[人間関係の] 練習……、人間関係ももうちょっと器用に、じゃないけど、やる必要があるのかあって思いますけど。

オネエキャラへのアンビバレントな意識

〔メディアからの影響ですか?〕メディアといったら、オネエキャラしかないから……。あんまり、自分が見てるときに、他人(ひと)と見たくないですね。やっぱし、なんか批判されるところがあるだろうし、「どう思う?」とか言われちゃうと、なんか答えづらい部分とかもあるかなあとか思いますね。——自分は〔あのひとたちと〕一緒じゃないよっていうことは伝えたいなあっていうふうに思うけど、あの人たちはあの人たちでいいと思うんですよ、自分としては。なので、それはそうかなみたいな感じですけど。なんかまあ、やっぱ、勘違いされるのは嫌だなあって思います。

〔実際にそういう番組を誰かとみた経験はあるか、ですか?〕 ー、なんか、自分はわりとチャンネル変えます。「他の見たいんだけど」みたいな感じで。家族と〔一緒に〕見たくないので。〔ゲイの友だちとだったら、ですか?〕 見れるかも。ふつうに、笑う。変な笑いじゃなくて、普通に、なんか楽しみながら見れそうな気はします。おかしく楽しく。べつにその人たちのことを非難とかじゃなくて……。やっぱ、そういうオネエだって、ある意味、いわゆる普通の人から外れた人じゃないですか、いわゆるですけど。そういう人たちが非難をされるのをもし見ちゃうと、——普通のノンケの人たちと見てて、自分たちもやっぱ普通の人たちとは外れた道じゃないですか。な

ので、ああ、じゃあ、自分たちも非難の対象なんだなって思うから、やっぱ、まったく別とは見れないんですよね、そのオネエの人たちのことを。そういう意味で嫌な感じはしますね。やっぱ、自分のなかに、格好とかはそこまで、いわゆる〔Male to Female の〕T(トランスジェンダー)のひとまでいってないけど、やっぱちょっと女らしい部分とかもあったりして、そこを非難されてるように見るのはつらい。両方ありますね。

地方の子にも見てほしいとブログを始めた

〔ブログとかミクシィで自分を表現しているか、ですか?〕 過去は全然、もうほんとに高校までは、とりあえず自分が脱出するために通らなくちゃならない道だみたいな感じだったんですよ。自分に課されたタスクじゃないけど、そういうふうに捉えてやってきたので、もうまったく早く抜け出してやろうと思ったので、とくに何もしてないし、ここを抜けるまでは自分のことを隠していこうと思ってたんですよね。そういう意味で大学に入ったときは、でも、1年間くらいはノンケ生活がんばって、ミクシィとかしてたんだけど、そのときは〔相手は〕普通の友だちだったんです。そうやって、次の年、2年生の4月からは、〔ゲイの〕友だちに会って、「ノンケとのミクシィなんてつまんない、あんなのやめなよ」みたいな感じで言われて、バサッとまた切って、新しいゲイ向けのミクシィを始めました。それから、3人っていうふうに、いま言ってるんですけど、スタッフとかで仲良くなって、いまはブログを始めてます、3

人で。イベントの告知はしますし、とくに、ゲイとかバイセクシュアル向けとかも入れますし。ゲイダーとか知ってます？ 掛けるんです、ゲイとレーダーを。それで、そのネタを使ったブログを書いたりとか。いっつもそれを書いているわけじゃないですけど、まあ、そういうふうには、けっこうわかるようにして。自分たちもやっぱ、地方で悩んでたのもあるから、ネットの部分とかも、地方の子にも見てほしいんだっていうのがあって、ブログとかを始めてます。アクセス数とか見ると、まあ、ぼちぼちですね、楽しみあります。

カミングアウトの体験

〔カミングアウトですか？〕最初にしたのは、6月くらいですね。2009年です。はい。その〔相手の〕人が、予備校の人っていうか、結局、いまも同じ大学なんですけど。地方のときに予備校で知り合って、それから同じ大学にたまたま行ったんですけど、そんなわけで、最後らへんのほうに仲良くなって、それで、カミングアウトついでに、告白もしちゃいましたね。——大学入試の前くらいから仲良くなって、大学1年生のときもずっと仲良くしてたので。

〔カミングアウトしようと思ったのは〕「すこたん」のイベントっていうので、一つのテーマについて話し合うっていうのがあるんですね。なんか変わったイベントなんですけど。で、自分が最初に参加した4月18日っていうのは、親へのカミングアウトという議題について参加者の人が話す…。そんなとき30人くらい来てたんですけど、自分より全員年齢が上の人なんで、自分が最年少だったんですけど、だいたい20代後

半、30代、40代の人とかが集まって、みんないろいろ経験があるから、その人の経験とかの話聞いてたっていうのがあって、やっぱ、カミングアウトに対するちょっと思いがあった。

というのと、自分は高校のときも、誰かに話したら楽になるんだろうなあっていうふうには思ってたんですけど、やっぱ信頼する人にしか絶対言わねえぞ、みたいな…。自分にとっては自分の性的指向っていうのは大事だったから、やっぱり、自分にとって大切な人ができたらその人に言おうっていうふうに決めてたわけですね。そういう意味で、なんか大学に入る予備校のときくらいからはだいぶ仲いい人ができて、その人とも仲良くなってきたし、やっぱもう一つは、仲いい〔ゲイの〕友だちもできてきたし、あと、その最初の「すこたん」のときに、同年代の人が親にもカミングアウトをしてるんだって話してたんですね、みんなの前で。そういう話もあって、すごいなって思ったりもしたし。そういう仲良くなった〔ゲイの〕友だちもいたし、まわりの話も聞いたりしたりして。で、1ヵ月、大学(がっこう)に行かなかったとかもあったから、なんか、むこうも、その仲良い子は心配して〔くれて〕たから、その人とたまたまゆっくり話す時間もとれたのもあったので、自分の気持ちも一緒に伝えて、踏ん切りをつけたかったし。まあ、自分のことを言ったほうが、〔そのことで〕その人とも関係がよくなっていったらいいなあっていう期待もあって、言ったっていう感じですね。

〔そのときの相手の反応ですか？〕やさしい人だったので、「あっ、そうなんだ。気付